

組織の各役割を生かした校内別室（SSR）での登校支援について

不登校生徒の状況

対象生徒は 18 名で、毎日または定期的に利用する生徒は「学校には通えるが、教室には入れない。」「他の生徒に会わないように登下校をしたい。」といった状況の生徒である。また、他生徒との関係づくりがあまり得意でない生徒が多い。

具体的な取組

◎SSRと修学支援委員会との連携

～全教職員がSSRの生徒を把握～

週1回の就学支援委員会（SC、SSWも参加）で、登校等が気になる生徒の状況を共有し、課題解決の検討を行っている。SSR利用する生徒についても委員会で取り上げ、学びの確保についても話し合い、全教職員で現状を共有することにつながっている。

◎養護教諭との関わり

～生徒の適切な居場所確保～

気持ちが不安定になり保健室に来室した生徒を、養護教諭がSSRにつなぎ、そこで話をし、生徒の状況に合わせた状況で過ごすことで、気持ちが落ち着き教室に戻ることができている。生徒にとってSSRはホッとできる居場所となっていて、不登校予防にも役立っている。

◎担任の関わり

～生徒を決して離さない～

担任は1日1回以上SSRに来室した生徒に声をかけている。配布物も手渡しし、担任が生徒との気持ちのつながりを大切にしている。保護者との連携も欠かさないようになっている。

◎環境の工夫 ～生徒の登下校や学習に配慮～

SSRの部屋は1階にあり、他の生徒との接触が少ない状況が確保されている。また、外との直接の出入口もある。机やパーティションも生徒の多様なニーズに合わせてられるよう可動式の備品を用いている。



成果

上記の通り各生徒の実態や方針を組織で把握しながら運用している。それにより校内別室利用の生徒をSSR担当者任せにはせず、担任や全教職員が生徒の成長や今後の課題を共有し、見通しをもって校内別室指導ができるようになった。また、行事には参加できるようになった生徒もいて、生徒のニーズに対応できた指導といえる。

課題

生徒ごとに異なる校内別室利用の理由や、多様なニーズに対応できるように、部屋環境、人的配置を整えていくことが課題である。

「校内別室における個別支援の取組」について

不登校児童・生徒の状

本校には、不登校・不登校傾向の生徒が各学年に複数いる。そのうちの9割は、SC・SSW・外部諸機関（相談・支援・医療）とつながっている。保護者と連携をしながら、教室には入れなくても、校内別室登校をしている生徒がおり、教室復帰に向けての取組や生徒の気持ちに寄り添い、それぞれに適した学習の場を提供している。

具体的な取組

・個別対応ができる面談室

本校では、面談室が職員室内に二部屋用意されている。教室には入れないが校内別室であれば、登校できる生徒に場所を提供している。

・外部との連携

職員室内の入口付近に面談室があるので、生徒の状況に応じて、学年の教員だけでなく、様々な教職員との関わりや生徒間での交流をもちつつ、教室復帰に向けて徐々に適応を図る場ともなっている。

また、保護者、本人にSC・SSW・外部機関との連携の促しも行っている。



・校内別室における個別支援

登校サポーターと共に、当該生徒の、その日の状況に合わせて、タブレット等を活用して意欲的に取り組めるプリント等を用意して、学習支援を行う。登校サポーターは、午前中までとなっているため、給食は担任が運び、予定の確認等を行っている。下校は一人できるが、学校を出る際には、事前に家庭に連絡をしている。

・校内委員会での情報共有

毎日登校するが、教室に入れない生徒への対応として、校内支援委員会等で共通理解を図り、行事予定・学習プリントの受け渡し、補習などを担任だけでなく、教職員で連携をしながら行っている。SCや外部機関との連携についても、保護者への理解を促しながら進めている。

成果

(1) 登校サポーターを導入し、週1回～2回の登校が定着してきている。また、外部支援機関との連携も良好であり、以前見られたような情緒的な不安定感が大幅に減少し、学習にも意欲が出てきている。

(2) 安心して相談ができる大人ができ、少しずつ自分に適した環境について伝えられ、自ら希望する姿が見られるようになった。

課題

学校やSC・SSW・外部諸機関と連携ができている家庭は、課題解決までの糸口が見え、支援の方法が考えられるが、関係をもつ事が難しい家庭に対して、どのようにアプローチをしていくかが課題である。

不登校生徒の教室復帰を目指した別室指導の取組について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は複数名おり、いずれもSCやSSWと相談しながら教室復帰を目標としている。別室を登校準備室と名付け、生活・学習リズムを取り戻すために、登校サポーターや教職員と午前中に学習や体験活動等を行っている。

具体的な取組

別室対応できる部屋の準備・提供 (相談室を2部屋準備)

月・水は登校サポーター、火・木・金はSCが常駐している。

いつでも自習の補助、相談相手、相談やカウンセリングができる状態を維持し、学校に登校しやすい環境を提供している。



登校サポーターの活用

登校サポーターと別室で持参した課題や提供された課題に取り組んでいる。また、登校サポーターと話をしたり、担任やSCと面談をしたりしている。配布物や掲示物等の準備を登校サポーターと一緒に活動することもある。また、タブレットを使用して教科の学習を登校サポーターと一緒にやっている。

SCやSSWとの連携

週1回、校内特別支援委員会(SC、SSW出席)を開催し、不登校生徒の現状を報告し、情報を共有することで、今後の対応を検討している。

不登校生徒の状況によっては、担任とSC、SSWが家庭訪問するなど、連携を密にしながら支援を行っている。

時間、場所を問わない登校スタイル

登校が困難な生徒は、周囲の生徒と比べ不規則な生活リズムであるため、午後に登校する生徒が多い。そのため、担任やSCなどと話をする形式や外部機関への参加も出席扱いにするなど、通いやすい場所に登校できるようにしている。

成果

登校場所が教室だけではなく、別室など、時間や場所を問わないスタイルが全員に浸透してきた。

学校内外問わず、複数体制にて不登校生徒の支援が着実に実行できるようになってきている。

課題

別室指導から教室復帰までが未だ困難である生徒が多い。今後はSCやSSWに助言をもらいながら教室復帰につなげる機会を増やしたい。

不登校生徒の学校復帰を目指す支援について

不登校児童・生徒の状況

不登校の生徒は、全学年で 44 名いる。そのうち、登校するまたは、できるようになった生徒数は 9 名である。

学校復帰を希望する生徒のために、全校体制で支援に取り組んでいる。

具体的な取組

学習の記録について

・校内別室登校時に学習内容を記録し、担任とのやり取りを行うファイルを活用している。

支援方法について

・毎週開かれる教育相談部会で情報交換を行い、個々の生徒に応じた対応策を考えチームとして取り組んでいる。
・担任より定期的に電話連絡をする。
・保護者、本人との面談を実施する。
・外部の支援機関等の案内を行う。

校内別室登校について

・教室復帰を目指して登校サポーターの見守りの中、自習形式で校内別室登校を行っている。(月曜日～金曜日)
・NPO法人カタリバの協力を得て、大人や中学生とのコミュニケーションがとれる校内別室登校を行っている。(毎週木曜日)



スクールカウンセラーについて

・区SCは、毎週水曜日、金曜日に来校。
・都SCは、毎週火曜日に来校。
ア：生徒と保護者 イ：保護者
ウ：生徒 様々な形式で相談可能としている。
・校内別室登校とSCとの相談を併用している生徒が 3 名いる。

成果

・個に応じた校内別室運営が行われ、教室復帰の足がかりとなった。
・毎週行われる教育相談部会で話し合い、担任だけでなくチームで取り組み、関係機関と繋いだり関係をつくったりすることができた。

課題

・校内別室登校をしたり、関係機関やSCに繋いだり個々の生徒に応じた対応をしているが、教室復帰に至らないケースが多い。

不登校生徒の支援について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校第2学年で、小学校の頃から不登校傾向であった。中学校では、毎日校内別室を活用している。月に1回SCとの面談も継続しており、参加できる授業の時間には、教室に行けるようになった。進路についても前向きで高校見学等も行っている。

具体的な取組

校内別室での支援の充実

毎日校内別室を利用し、支援を望む生徒が別室に登校している。生徒の希望する日時に登校し、自学や読書、時には校内別室の生徒同士で絵しりとりやSST教材などを活用し、交流を深めている。週に3日間は登校サポーターが待機し、生徒の自学を見守り、サポートすると共に会話などから交流を深めている。



SCやSSWとの連携
週に1回支援委員会を開き、SCやSSW、各学年のコーディネーターと情報共有を行っている。具体的に支援を勧めたい生徒に関して、SCやSSWから様々な支援形態を紹介してもらい、支援内容を検討している。

登校サポーターによる登校支援

家庭環境の把握や登校の後押しとなるよう、朝の登校時間に登校サポーターを活用している。朝に自宅まで訪問することによって登校刺激となり、後から一人で登校できることもある。

外部機関との連携

チャレンジ学級や教育相談に通う生徒の情報共有を月に1回教育相談コーディネーターが行っている。出席日数の把握や外部機関での様子などを教えていただき、各家庭への訪問や電話連絡の際に役立てている。

成果

教室への登校が困難な生徒が別室には自分で決めた曜日にきちんと登校できるようになった。テスト前や行事前などは教室に行けるようになり、様々な教員と関わりをもつこともできている。

課題

ICTを活用した支援の充実が必要である。また、別室に常時いられる教員が不足しており、増員の必要性を感じる。

不登校の未然防止・対応について

不登校児童・生徒の状況

- ・小学校から継続して登校できない生徒や、学力の積み上げがなく授業に追いつけずに不適應を起こす生徒が多い。
- ・登校しぶりの登校生徒も含めて、各クラス1～3名程度の生徒に登校支援が必要である。

具体的な取組

① 校内別室（スマイルルーム）の開設・運営

常時最低1名の生活指導員が常駐しており、校内別室での学習環境を整えている。生徒自身が学習内容を設定して、小学校の内容から学び直しを行う生徒もいる。SCやSSWが定期的に様子を見に来て、相談しやすい環境となっている。



② 個別学習支援室（キャッチアップルーム）の開設・運営

学習のつまずきによる学習不適應を起こさせないために、取り出し学習を行い、不登校予防をしている。特定の教科に著しく苦手さを感じている生徒に対して、保護者の同意を得た上で校内別室にて学習ボランティアが1対1で指導を行っている。学習障害が疑われる生徒については、教育相談を勧めるなど支援している。

③ SC・SSW・民生児童委員との連携

毎週木曜日に、校内委員会を開設している。不登校生徒の情報の共有と今後の対応を検討している。不登校生徒の状況によっては、SSWによる訪問や、SCによる電話連絡も行っている。また、民生児童委員にも校内委員会に参加してもらい、地域として支援をお願いできる場合は、依頼している。

④ 不登校対応ボードの作成

担任が一人で生徒への支援を抱え込まないように、また担任によって支援にばらつきが出ないように、各学年の対応ボードを作成した。不登校生徒の最終確認日を一覧で把握している。定期的な登校刺激ができ、家庭に学校との繋がりを感じさせるとともに、学年全員で対応することで、担任の負担軽減にも繋がっている。

成果

- ・スマイルルーム・キャッチアップルームを活用することで、学校との繋がりをもてる生徒が増えた。
- ・学年の教員全員で対応することで、学校全体の課題で対応することができている。

課題

- ・登校サポーターや、学習ボランティアの継続的な任用が難しく、年度によって支援が途絶えてしまう。
- ・スマイルルームから教室復帰への移行が難しい。

不登校生徒等への取組について

不登校生徒の状況

当該生徒は3年生であり、入学時から登校に対して不安定な状態が続き、学校には登校はできるが、教室に入れなかったことが度々あった。ケース会議を行い、医療機関につなげること等に向けて、チームとして支援していくことを決めた。

具体的な取組

別室を活用した対応

時間割上に別室担当者を決め、常時1名の教員が常駐している。パーテーションで区切るなどして複数の生徒が使用する際に他の生徒が気にならないよう配慮している。

登校サポーターの活用

登校サポーターの出勤日には、お迎え支援や別室の運営、学習の見守りを行っている。

別室を使用する生徒は、A Iドリルやワークなどの個別でできる学習課題にそれぞれのペースで取り組んでいる。



SCやSSWとの連携

週1回、支援会議（SC、SSW出席）を開き、不登校傾向のある生徒など特別な配慮を要する生徒の情報の共有と今後の支援方針等について検討している。

不登校生徒の状況に応じて担任だけでなく、SSWが家庭訪問を行ったり、登校サポーターを活用した支援を行ったりしている。



週3回、都と区のSCが来校し、相談室にてカウンセリングを行っている。

リモートでの面談

週1回程度、担任がリモートで不登校生徒の顔を見ながら面談を行っている。

成果

- ・ 別室登校を行っている生徒のうち、毎年卒業間近になり教室復帰をしている生徒がみられる。
- ・ これまで電話連絡を行っていた生徒とリモート面談を行うことができた。

課題

不登校生徒とのリモートを活用した面談については、個々の生徒の事情もあり全ての教員が行えていない。

不登校生徒への校内別室での支援について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校2年生。小学校の時は登校できていた。しかし、中学校に入学した当初は教室に入ることができていたが、徐々に欠席が増えた。不登校の要因は、集団生活への不安が大部分を占めている。中学校1年生の後半から校内別室登校ができるようになり、学校に意識が向いてきた。今後、生徒の状況等に配慮していきながら教室への復帰を見据えた支援を継続していく。

具体的な取組

入りやすさ、過ごしやすさを優先し落ち着いた空間

①安心して登校できる校内別室

登校後、玄関からすぐ近くの「だんだんルーム」を校内別室登校として使用している。他の生徒との関係を気にしている生徒にとっても、登校しやすい環境を提供している。



②各自の登校状況に応じて

校内別室は、月・木・金の午前中に開設している。その中で、各自の生活リズムに合わせて登校日や登校時間を選択できるようにしている。まずは、自分のスタイルで前向きな気持ちで登校できるよう工夫している。

③各自の学習状況に応じて

校内別室では、各自の自主学習を基本としている。また、内容によっては、同じ時間に登校した他の生徒と協働学習ができるようにもしている。さらに、区から貸与されている一人1台の端末を活用した学習も推進している。少しずつコミュニケーションの輪が広がることで、教室への復帰のきっかけとなっている。

④校内支援体制の構築

校内別室には、足立区の登校サポーターが常駐し、支援体制を構築している。その中で、担任や学年教員が部屋を訪れ生徒と話をしたり、配布物を渡したりする時間にもなっている。また、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーもその中に加わり、より安心して登校できる環境をつくっている。

成果

- ・今まで登校の機会をつくれなかった生徒が、安心して登校できるようになった。
- ・登校サポーターやスクールカウンセラーなど多くの人からの支援を得やすくなり、校内の教職員の連携もより強まった。

課題

- ・校内別室から教室復帰までの過程が困難である。
- ・校内別室登校を希望する生徒が増加し、時間と場所の確保に課題がある。

校内別室指導支援員を活用した居場所づくりについて

不登校児童・生徒の状況

対象生徒は複数名いる。朝から登校し下校時間まで学校で過ごすことができるが教室に入ることが困難な生徒のほかに、家から出ることが難しいが登校サポーター（校内別室指導支援員）とコミュニケーションをとるために登校する生徒など様々である。教室に居づらい理由としては、友人関係や騒がしい雰囲気や苦手、過去のトラウマ、複雑な家庭環境等の様々な理由があがる。

具体的な取組

玄関横の地域連携室の活用

地域連携室には和室が併設されており、勉強スペースとくつろぎスペースに分けて、校内別室支援を行うことができる。



不登校生徒への居場所支援

勉強する場所だけでなく、不登校生徒同士のコミュニケーションや不登校の生徒と登校サポーターとのコミュニケーションがとれる場所をつくっている。

コミュニケーションをとりやすいように、トランプなどのゲームを設置し、学校が生徒の居場所になるように環境整備している。



登校サポーターの複数配置

本校は現在 4 名の登校サポーターが在籍しており、週に 4 回校内別室支援が行われている。登校サポーターは、リモート授業の見守りや生徒の話の傾聴等を行っている。

校内での組織連携

週に 1 回、管理職・各学年主任・養護教諭・特別支援教育コーディネーター・SC・SSWがメンバーで校内委員会を開き、不登校生徒や校内別室支援での状況を共有する場を設けている。

成果

登校サポーターを複数配置にしたことで、生徒がそれぞれ相性のいい登校サポーターを見つけ、自分の気持ちを話す機会にもつながり、それぞれの居場所になっている。

課題

登校サポーターが勤務しない日、時間の校内別室の登校希望への対応が今後の課題である。

I C T を活用した校内別室の運営について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校3年生で、昨年度学級において、親しい友人が病気で一週間休んでいる間に、教室に居場所がないと思うようになった。また、お腹を下しやすく、静かな教室環境において強い緊張を感じると相談があり授業に参加できなくなった。その後は校内別室指導の部屋に定期的に登校をしている。

具体的な取組

○教育相談部会でのアセスメント

教育相談コーディネーターが運営を担い、S C、S S Wなどの専門家や特別支援教室や生活指導員など多方面から情報を収集し、効果的な対応を検討する。実際に関わった校内別室指導支援員や生活指導員から生徒の様子を報告してもらい、検証を行った。

○部活動への参加

当該生徒は、部活動には前向きな気持ちで参加を希望していた。そこで、給食前に登校をし、校内別室指導で給食と午後の時程の学習を進め、放課後の部活動に参加するリズムを確立することができた。そのことが自信となり、実技教科などの一斉授業への参加にもつながった。

○オンライン授業参加

新型コロナウイルス感染症予防対策でオンライン授業の配信を行っていた。そのスキルを利用して校内別室指導の生徒に向けて授業配信を行い、大型モニターの映像で学習を進めた。校内別室登校をしている同じ学年の生徒同士が授業を受け、良好な関係が構築された。

○一人1台端末での個別学習

A Iドリルでの学習は、個の進度に合わせて自分のペースで学習ができ効果的であった。



成果

不定期に登校する生徒に対して、以前は、空き時間の教員が対応していたが、支援の効果が上がらなかった。しかし、生徒と校内別室指導支援員に信頼関係が築けたため支援員の勤務に合わせて登校できるようになったため、したことで生活リズムが整ってきた。家庭とのオンライン面談も効果的であった。

課題

支援体制には限界があるため、継続的な支援ができていない。不登校生徒の増加により、ハード面も不足している。

ストレス過敏の克服を目指した個別指導について

不登校児童・生徒の状況

- ・ 小学校から不登校が継続している。
- ・ 大きな声や音に敏感で、怒声などには自分のことでもなくても過敏に反応する。
- ・ 集団のザワザワした雰囲気も苦手で、緊張して動けなくなることがある。

具体的な取組

担任・学年教員

- ・ 最初は校舎に入れず、「校門タッチ」から始めた。当該生徒が安心できるよう、徐々に段階を踏んだ支援を行った。
- ・ 特別支援委員会で当該生徒の状況を確認しながら、校舎に入れる段階から、①挨拶登校、②支援教室利用、③校内別室利用へと進めた。

特別支援教室

- ・ 週 1 回の個別指導を実施した。
- ・ 話を傾聴することを中心として、コミュニケーションの機会をつくった。
- ・ 趣味の話をするようになり、会話も増えた。
- ・ 担任と連携して校内別室学習を勧め、6 月末から校内別室利用を開始した。

S C

- ・ 週 1 ～ 2 回のペースで実施した。
- ・ 保護者と当該生徒で分けて面談した。
- ・ 特別支援委員会で当該生徒の様子を確認し、校内で情報共有した。
- ・ S C 面談と日を合わせて校内別室の利用を始め、徐々に利用日数が増え、10 月頃は毎日利用出来るようになった。

校内別室学習

- ・ 外部人材（別室支援員、生活指導員）等を活用し、午前中に学習する機会を設けた。



成果

- ・ 学級で取り組みやすい教科から授業参加を開始し、年明けには教室で 1 日過ごせる日が増えた。
- ・ 休み時間など、友人と楽しく話す様子が見られるようになった。

課題

- ・ 校内別室学習を支援するための人材を恒常的に確保することが課題である。

校内別室登校生徒の教室復帰への取組について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は中学校 1 年生の後期から、クラス集団内にいることへのプレッシャーが原因で登校を渋り、校内別室登校が続くようになる。中学校 2 年生になった現在も、週に 1・2 日欠席することもあるが、校内別室登校が習慣になっている。

具体的な取組



◆ 校内別室登校支援

校内別室には不登校支援サポーターが配置されており、原則として毎日開室されている。当該生徒とは適宜、担任等が授業の進捗を確認し、自習の計画を立て、タブレット等を活用して学習に取り組んでいる。

◆ 個別の日誌の作成

校内(校内別室、学級)での活動を生徒が自分で振り返り、考えたこと、思ったこと等を記入する。その日誌を担当、学年教員等で共有し、生徒の状況把握と対応について話し合い、今後の学校生活への支援を行っている。

◆ A I ドリル Qubena の活用



タブレットを用いて、A I ドリルに取り組むことにより、個人の理解度・進捗に合わせた学習ができるため、当該生徒も意欲的に取り組んでいる。

◆ 関係機関との連携

校内では、スクールカウンセラーとの情報共有を行い、校外との連携では適応指導教室の担当者とも情報交換を行い、複数の視点から生徒理解を行っている。

特に学校行事に際しては、どのように参加したいかをそれぞれが聞き取り、情報共有の結果を基に複数の選択肢のなかで参加を促している。

成果

当該生徒は A I ドリルを中心とした学習を続けた。結果、定期考査では当該生徒が目標とする点数を獲得することができている。また、行事をきっかけとして、教室に顔を出す回数も増してきている。

課題

当該生徒は、自分の意思や考えを主張できず、様々な確認や聞き取りに時間を要していることが多い。